

全国病児保育協議会のホームページ <http://www.byoujihoiku.ne.jp>

全国病児保育
協議会
広報委員会

病児保育協議会ニュース



＝今号の目次＝ 第20回記念大会・総会特集

- 1頁 協議会メール 第20回記念研究大会を終えて
- 2頁 記念講演まとめ
会頭講演まとめ
- 3頁 特別講演まとめ
- 4頁 教育講演1まとめ
教育講演2まとめ
- 5頁 ステップアップ研修①報告
- 6頁 ステップアップ研修②報告
分科会報告
- 7頁 分科会報告

- 8頁 分科会報告
ワークショップ報告
- 9頁 ワークショップ報告
- 10頁 ワークショップ報告
ポスター発表報告
- 11頁 ポスター発表報告
- 12頁 ポスター発表報告
感謝状贈呈
広報ワールド報告
- 13頁～16頁
第20回全国病児保育協議会総会議事録

協議会メール

第20回記念全国病児保育研究大会(東京)を終えて

第20回全国病児保育研究大会 会頭 帆足 英一



第20回記念大会は、「はばたけ病児保育！～専門性のもとに健康支援を～」をメイン・テーマとしてプ

ログラムを検討してきました。プログラム内容は、東京地区の勉強会(保育士・看護師100名以上参加)を開催したり、その場での企画に関する討議、東京地区の保育士・看護師へのアンケート調査等、現場スタッフの意向を極力取り入れるように努力しつつ、実行委員会での検討を何回も重ねて企画が練られました。

多くの現場スタッフからの意見として、自分が主役になって十分な時間をかけて一つのテーマを掘り下げたいということで、2時間のワークショップを8テーマ設けた次第です。ワークショップのテーマも、現場の声を反映させた企画を中心にしました。

ポスターセッションも充実させました。直接、身近に発表者と論議ができるということで、現場サイドの要望として拡充したわけです。開場では、実際に座り込んで

討議している場面もありました。

教育講演は、20回記念として、一つは保育者として「こどもの傍らに在ること」の意味について、現在も尚、保育現場でこどもに寄り添って関わっておられる大場幸夫夫妻女子大学学長に「保育の原点」に立ち返る講演をお願いしました。もう一つは、病児保育で保護者への支援をする上で、気になる親が急増している今日、その親への理解を深めるために成育医療センターの笠原麻里育児心理科医長をお願いした次第です。親御さんと日々つらい相談を受けておられる先生からのお話でした。この教育講演は、初日の午前10時スタートであるにも関わらず、大勢の会員が聴講され、びっくりしました。

特別講演は、保育所保育指針策定の中心的な役割を果たし、保育所や幼稚園に勤務された経験、また自治体での研修課長もつとめられた天野珠路前専門官をお願いしましたが、千葉大会とは異なる視点で病児保育へのエールをいただいた次第です。

アフタヌーン・セミナーでは、これまで協議会研修会や研究大会

において、集中的な論議がされていなかった「病児保育における感染症への留意点」を取り上げました。今年のお～冬にかけても、またもや新型インフルエンザをはじめ、種々の感染症の集団発生が予測されているところであり、病児保育協議会としても本腰をいれて感染症対策に継続的に取り組むきっかけ作りとして企画したものです。

今後、病児保育マニュアルの改訂をも視野に入れた感染症プロジェクトを立ち上げることとなるでしょうが、その第一歩としてのものです。

ランチオンセミナーは、何百名もの参加者の昼食を一斉に取るだけのレストラン等が整備されていないということで、参加者の利便性を図るために企業協賛で2日間1,000名分の昼食を用意させていただきました。

記念式典は、基本的には協議会が主催の内容です。行政を含めて、関係機関、保健・医療・福祉のトップクラスの方々から、今後の病児・病後児保育へのエールをいただくことができました。学識経験者等から病児保育不要論もちらほらと

出ている現在、あるいは、地方自治体における「仕分け」の対象に病児・病後児保育事業がなったという報告もある今日、その動きにストップをかける狙いもありました。

厚生労働省のお祝辞では、伊岐雇用均等・児童家庭局長から、ご挨拶と長妻厚生労働大臣祝辞の代読をしていただくことができました。ただ、記念式典への出席者が少なかったのが残念です。

記念式典に続く記念講演は、子どもの権利擁護の根幹にある「子どもの命の輝きを大切に」というテーマで、潮谷義子長崎国際大学学長(前熊本県知事)から基調なお話をいただきました。「子どもの生命に寄り添う、病に寄り添う、

子どもに寄り添う」ことの大切さ、そして母親に寄り添うことなど、心に響くお話をいただきました。

交流会では、いまやプロとして活躍されているウクレレとボーカルの「IWAO」、「サクラタイム〜」がボランティア出演、そして東京ブロックのスタッフによる余興等、大いに盛り上がりました。

研修委員会プログラムとしては、基礎研修としての「保育」「看護」「保育看護」、ステップアップ研修として「食物アレルギーをもつ病児の食事について」「発達生涯をどう受けとめるか」が企画されました。後者は、自らをステップアップさせていく研修課題のため、難解な部分もあったようです。

以上の企画でしたが、「はばた

け病児保育—専門性のもとに健康支援を」は、病児保育に従事する保育士、看護師、医師等が病児保育における保育の基礎を固め、病児保育としての感染症対策を含めて、安心、安全のもとに病児・病後児の権利擁護を堅持し、次の10年間をはばたける基礎づくりの出発点の願いをこめた大会でした。

本大会の開催に向けて、稲見実行委員長、池田事務局長をはじめ、実行委員会のメンバー、そして100名近い当日スタッフ(保育士・看護師・医師・事務スタッフ等)の方々、そしてご協賛いただいた諸団体、ご寄付をいただいた企業並びに協議会施設の方々へのご協力に深く感謝申し上げます。

記念講演まとめ

「子どもの命の輝きを大切に」

講師：長崎国際大学学長・前熊本県知事

塩谷 義子 先生

報告者：八尾徳洲会総合病院

神原 雪子



講師の塩谷先生

全国病児保育協議会研究大会の第20回記念の記念講演として、前熊本県知事であり、現在長崎国際大学学長である潮谷先生に講演いただきました。福祉現場の従事者として

27年間乳児ホームに携わった経験から、現代社会が抱える育児に関する問題をさまざまなデータをとおし、ご教授くださいました。少子高齢化が進む中で家族形態が変容し、虐待などの問題がでてきました。そして、男女参画社会がうたわれ、女性の社会進出がすすみ、共働き世帯が増え、現在では

夫が働き・専業主婦の世帯より共働き世帯の方が多状態となっています。その中で、仕事と育児の両立が困難になる要因として、子どもの病気があげられます。潮谷先生は、育児を支えるために病児保育は重要なものとしてとらえ、保育看護という専門性ととも子どもに必要なおしゃっていただきました。これは病児保育に携わる私たちにとって、励ましのことばと思えました。また、病児保育を、ヒト・モノ・コトから現場についてお話しいただき、とても参考になりました。携わる私たちが子どもの生命の輝きのために日々努力していきたいと感じさせるすばらしい講演でありました。

会頭講演まとめ

「病児保育の歩みと課題」

講師：ほあし子どものこころクリニック

院長 帆足 英一 先生

報告者：大分こども病院

藤本 保



講師の帆足先生

例年、帆足先生は基調講演をされていますが、今回は会頭として病児保育協議会の20年

の歩みを講演されました。病児保育マニュアルのダイジェスト版といってもよいような内容で、病児保育の歴史に始まり多岐にわたる協議会の軌跡のすべてをコンパクトに要約されました。講演要旨は

プログラム・抄録集の32ページから37ページ記載されておりますのでお読み取りください。

平成3年9月に全国病児保育協議会が14施設の加盟のもとに結成されたのですが、その原動力になったのは、帆足先生が班長をされた当時の厚生省心身障害研究「小児有病児ケアに関する研究」に協力し、本研究を遂行するためでした。引き続き行われた「病児保育のあり方に関する研究」の成果により、今日の病児・病後児保育事業に繋がっているのです。その時以来、帆足先生は顧問として

現在も我々を導いてくださっています。

今回先生が強調されたことは、2名の児童に対して職員1名という手厚い体制で、保育看護という新たな専門領域を樹立して、すべての協議会加入施設が1度も事故なく運営して来られたことは誇るべきである、ところが、現在の病児・病後児保育事業となり国の主管課が保育課となり、人員配置の面でこの2対1が揺らぎ「安心・安全」の担保に懸念が生じる可能性を心配されていました。ここであらためて、手厚い人員配置と看護師と保育士が協力して実践する「保育看護」という専門性が病児

保育の「安心・安全」の根幹であることを力説されました。また、病児保育は究極の育児支援であることを改めて説明しました。

さらに、協議会が持つ種々の課題を解決するためには、協議会が法人化せねばならないこと、機関誌「病児保育研究」が創刊できたこと、自己評価基準の改定が必要であること、協議会認証制度を発足すべきこと、病児保育事業所を「病児の子育て支援ステーション」とすること、そして「子育て支援のセーフティネット」事業所として認定するよう国に強く働きかけていかななくてはならないことなど例をあげて詳細に説明されまし



た。

最後に、実施主体の市町村にこの事業の重要性を説き、病児の権利擁護に配慮した病児・病後児保育事業となるよう働きかけ、制度の拡充に向けて努力しなくてはならないと結びました。

特別講演まとめ

「病児・病後児保育への期待」

講師：前厚生労働省保育指導専門官・日本女子体育大学
スポーツ健康学科幼児発達学専攻 准教授 天野 珠路 先生
報告者：中野こども病院

木野 稔



講師の天野先生

天野珠路先生は、保育士、幼稚園教諭として勤務の経験があり、教職を経て厚生労働省で活躍の後、再び教職へと貴重な経歴をお持ちである。昨年の千葉大会では保育指導専門官として新保育所保育指針の解説をされ、病児保育室の保育士は新しい保育指針を活用しながら、保育看護の質の向上につとめていただきたいと述べられていた記憶が新しい。本講演は、ご長男が喘息で発作の度、何度も仕事を休むことになったという先生ご自身の育児体験談から始まった。大人は病気をダメなことと捉えているが、子どもは大人の様子、特に共働きの親が困る姿をみて、子どもなりに思わぬ心配をしている。保育所で急に熱を出した子がいると、早く親が迎えに来ないかなという保育者同士の会話にも、子どもは敏感に察知している。親と保育士間の空気も鋭く読んでいます。本来ならば子どもをしっかり観察

し、状態に応じた配慮を行い、くつろげる環境を整えるべき時である。病児保育室における少人数保育では、子どもは不安を解消し、病気で弱っている時に自分を大事にしてもらったという、人への信頼感を確実にし、他者への思いやりの大切さを学ぶことができるという良い連鎖が生まれる。まさにマイナスがプラスの経験になるのであるということを強調された。現場で働いているスタッフは皆、同意を得たりと感じたと思われる。

病児保育室の現状と今後のあり方については、看護師と保育士が連携し専門性を発揮すべきであることから、保育士の養成課程が重要で、保育学が核となり保育心理や保育家庭学の視点をもったカリキュラム改正に期待したいと述べられた。医療の中で保育士の専門性を構築するには、実践について根拠を持って発表する必要がある。保育は単なる子育ての延長、託児ではないが、まだまだその点で社会的認知は遅れている。保育士は経験則や感情を出しすぎず科

学的根拠をもってほしい。最近の看護における専門性構築は大変参考になる。医師の診療補助から業務内容を見直し、カテゴリーに分けて質の向上に取り組み、看護技術の独自性を確立した。保育士においても、タイムカードスタディという研究が始まり、来年度から新たな養成課程ができるので大いに期待したい。

6月29日政府は「子ども子育て新システム」を発表した、病児病後児保育においても、すべての保育所・子ども園への看護師配置を目指す「体調不良児型」、多くの事業者の参入を前提としている「訪問型」への記述がみられる。病児保育の量の拡大とともに質の低下を招いてはいけない、事業の着地点を見据えて現場から、実践と経験に基づいた提言をすべきと述べられた。

以上のように、病児病後児保育を行っている我々へのエールをいただき、そして協議会の役割がこれから非常に重要になるという創立20周年記念大会の特別講演にふさわしい内容で締めくくっていただいた。



教育講演 1

気になる親への理解と援助

講師：国立成育医療研究センター病院
育児心理科医長 笠原 麻里 先生
報告者：千木良医院

千木良 淳



講師の笠原先生

第20回記念大会の初日、それも最初の講演とあって沢山の人が講演を聴きにきてもらえました。講師の笠原先生は、慶応義塾大学精神神経科入局後、現在 国立成育医療研究センター病院で育児心理科医長をやられています。

私は勉強不足で恥ずかしいのですが、病児保育をしていて育児心理科という科があるのは初めて知りました。育児を親の行動から考えてみるという全く違った視点で子育てを考える、今まで自分自身でもあまり気にならなかった分野で

す。日々の診療で思わずやり過ぎてしまう親の行動や、保育士さんや看護師さんには、病児保育していて子育ての支援をしてあげられるヒントが見つかるかと思いい、講演を楽しみにしていました。

気になる親、心配な親、困った親は、つまりは ” 困り切った親 ” で支援を求めているはずなのだが、その SOS を出し切れていない親なのである。

” その気になる親 ” の特性は、二つのタイプで考えるとわかりやすい

1, 親自身が精神的、もしくは身体的な疾病を有してたり、人格的に問題がある場合。また親自身が被虐待経験をもっていたりするタ

イプ

2, 親自身に何らかの発達障害の要素が見られるタイプ

普段 子供を怒ってばかりいる親、子供の洋服がいつも汚い、子供の病気に対して理解のない親 etc . . .

今までは、” 本当にこの親は困ったな～、もう少し子育てをきちんとしたらいいのに。きちんとした服ぐらい着せてあげたらいいのに ” と思っていたのですが、この様な親には苦しんでいる、本当はこちらから支援をさしのべなくてはならない。我々、医療サイドでも、その親への医療的な介入しつつ、保育と行政と連絡を取りながら、その子供の成長の援助をなくてはならない。世の中には色々な人がいて、こちら側の考えで医療や保育をしてると、見失いがちな点だと考えさせられました。このような親や子供が現在、世の中に埋もれて生活をしている、それをなんとか救い出さなくてはならない。再認識をした講演でした。

教育講演 2

子どもの傍らに在ることの意味

講師：大妻女子大学
学長 大場 幸夫 先生
報告者：ほあし子どものこころクリニック
帆足 暁子



講師の大場先生

教育講演は、「保育所保育指針」改定に関する検討会の座長を務められ、大妻女子大学学長の大場幸夫先生に講演をして頂きました。

大場先生は、1976年から学長になられた現在におきましても30年以上に亘り保育所の巡回相談をなさっておられる実践家でもあります。今回は、一昨年「日本保育学会保育学文献賞」を受賞された「子どもの傍らに在ることの意味」(萌文書林)をテーマにお話し下さいました。

先生は、学生時代に進路を決め

るにあたって、心理判定員として出逢った施設のこどものリアリティー「人生経験の圧縮した10代(子ども)が20代の若者である私という人間に助けを求めているながら、助けることの困難な状況であることを知っている」ことに強く心が揺さぶられたことが原点とされていました。「子どもにとって私は何ものなのか」その声をいつも突きつけられてくるように感じておられたそうです。子どもと生活はしていたけれど、子どもにとっては「物理的にそばにはいたけれど、いてくれなかった」のではないかと考え続けられます。人として何が出来るか、「私」がどういう生き方であることが求めら

れていたのかを考え、その答えはこどもの傍らにあるということが大きなヒントになられたそうです。そしてそれは専門の領域だけではなく、人と人が向き合うあり方でないかと考えられます。

保育者は、こどもの傍らにあるということは自明のことと捉えてしまっていますが、「覚悟があること」であることを警鐘しています。「こどもが好き」ということを動機として保育職は仕事に就きますし、こどもはこどもを好いてくれる大人を求めていることも確かです。だからこそ先生は、そのことについて自分の心の有り様を、「こどもが好きな自分をこどもは許容するに違いない」という思い込みが一方的な行為であることに気づかなければならないと考えられます。

保育における「ケア」も同様であり、「ケア」は良きこととされ、大人のこどもに向けた保護養育の働きかけとされますが、「ケア」の意義は一方的なこどもへの働きかけではないこと、「ケア」=「世

話」が強調されるが保育者に信頼を寄せる気持ちがあれば子どもと家庭にとって大きな支えになっているかを知ること、そして保育における「ケア」はノウハウではなく「子どもと家庭」との関係性に影響を及ぼしていることにも留意しなければならぬともされ、ケアの過程で子どもは生活者としての感性と知性の基礎を培う機会ともなっていることにも留意が必要だと話されました。

今、国家資格化された保育者に求められていることは、所謂「契約」としてではなく、子どもの育ちと子育て家庭を一体的に支える働きの担い手として「心に誓う約束」であると話され、NAEYC(全米乳幼児教育協会)の倫理要領にも言及されました。生活を共にする大人に子どもが求めること

は、自分の不安を払拭できる人であり、味方・肩をもってくれる人であり、一緒にいてくれる人であり、自分を大事にしてくれる人であると話され、その上で子どもにとって十分に安心感や信頼感をもてる存在である大人によって、子どもは自分に自信を持ち、人と関わる意欲や力を発揮できることも話されました。

そして、職員間の連携として、全職員が異業種間においても同僚として対等に協働することの大事さにも触れられました。そのことが、子どもが安心感をもって「子どもさながらの生活ができる」ことに繋がるからです。大場先生は、今回のお話を通して、「子どもの傍らにある」ということを洞察し、そのことが今の子どもや家庭にとって最も適切なあり様では



ないかと提案されました。

先生のお話は、病児保育においても日常的な遊びやケア、保育看護も大切ではありますが、その基盤になる「子どもの傍らにある」という保育の原点がなござりにされていないかという問題提起であることに気づかされました。実はこのことは東京大会で、大切にしたいメッセージでもあります。

頂く事をお勧めします。

そして、私共が最も神経を注ぐ誤食に関しては、学校給食での事例をご提示いただきました。いずれも、誤食とは、ちょっとした勘違いや確認ミスから生じるものです。しかし、アレルギーをお持ちのお子さんにとっては、肉体的、精神的な苦痛や提供される食事への不信感、更には生命の危険までも招く事になり兼ねません。これらの事例を通じ改めて、報告、連絡、確認といった基本の重要性を痛感いたしました。

林先生のお話を伺い思うことは、細やかな栄養指導は、相手の様々な現状を把握し理解する事から始まるのだということです。保護者が、食物除去について、どう考え、何を不安や疑問に感じているのか、そしてその問題点をどう解決していくか・・・といったアセスメント。このプロセスは私共の保育看護にも共通する、支援の中核となるものなのだと思います。林先生のご講演は具体的な内容はもとより、そのプロセスの重要性を改めてお示し頂いたように思います。ご講演が終了した瞬間の、満腹感と明日への躍動感は、今でも心に残ります。

最後になりますが、本大会は20回という記念すべき大会にも

ステップアップ研修①

食物アレルギーを持つ病児の食事について

講師：国立病院機構相模原病院

栄養士 林 典子 先生

報告者：練馬区医師会病後児センター ぱるむ

江頭 則子



講師の林先生

これまで、様々な機会に食物アレルギーについての講義を拝聴しておりました。しかし、今回、食物アレルギーを「栄養指導」という角度から学んだことは、「ステップアップ研修」として、非常に有意義なご講演であり、我々現場の保育者にとっては、学びの多い一時間となりました。

まず、食物アレルギーの治療となる原因食物の除去は必要最小限でなければならない！という基本線をご提示頂きました。その背景として、除去を強いられるご家族の負担は多く、不安や悩みを抱えながらご苦労されている現状を調査データや事例によってご紹介頂きました。情報量が膨大になった昨今、情報の正確性には若干課題があり、食物アレルギーの原因食

物除去においても、誤った解釈は少なくありません。そのような現状の中で、ご家族の負担を思うと、正しい情報の発信は我々保育者にも求められる大きな責任となるのでしょうか。そのためには、まず私たちが正しい理解のうえで、食物アレルギーのお子さんに関わる事が大切になってまいります。

病児保育室は一時的なお預かりであるため、その都度除去の内容を確認し、食事を提供する場面では誤食のないよう日々努めております。ただ、残念ながら、除去のお子さんについて、専門職である栄養士の方と細かに相談できる機会が必ずしも確保できるとは限りません。林先生のお話には、そのような私共への手助けとなる具体的な内容が多く盛り込まれておりました。今回残念ながらご参加になれなかった皆様には、林先生も尽力された「食物アレルギーの栄養指導の手引き 2008」をご参考

関わらず、ステップアップ研修の座長という大役をお与え頂き、ありがとうございました。本来、研修委員の先生方を始め、これまで

病児保育を築き上げていらっしゃいました諸先生方の役と存じております。一方で、このような機会は、現場の保育士や看護師にとっ

て、日常では得られない学ぶべき点の多い経験となりました。改めて感謝申し上げます。

ステップアップ研修②

発達障害をどう受け止めるか

講師：浜松市発達医療総合福祉センター

療養センター長 山崎 知克 先生

報告者：ぼけっと病児保育室

宮田 章子



講師の山崎先生

子どもにかかわる専門職が発達の考え方や発達障害児を捉えやすくなることを目的に、今問題になっている

発達障害についてのカテゴリーの概念や注意欠陥多動性障害、広汎性発達障害 学習障害 軽度精神発育遅滞の個々の疾患概略を解説、そのスクリーニングの評価尺度であるADHD-RS, 日本語版M-CHAT, PARS, WISC-IIIなどの紹介をしていただきました。

発達障害児は児童期に約6.3%をしめしますが、その初期症状で多いとされる視線が合わない、言葉が遅いなどの症状でスクリーニングすると幼児期では10%をしめるとも言われています。

年齢とともに発達が追いつきその頻度は減少しますが その間保育に関わる保育者は集団保育において随所に個別対応が求められます。病児保育の場面では児が病気であるという悪条件で保育がさらに難しくなりますがより、密度の濃い人員配置を有効に使う観察しきめ細かな保育ができる環

境でもあります。

幼児期の発達障害児によく見られる特徴を把握していなければそのサインも見落とします。乳幼児期の特徴やアタッチメント形成にも触れて頂きました。正常なアタッチメント形成についての解説に加えアタッチメント障害の概説と発達障害との比較と違いを説明されました。

最後に発達障害やアタッチメント障害のサインをもっているお子さんたちの対応について、子どもは困り感は大人与の関係障害であるので 1, よい考えや行動を教える: しつけ 2, 環境調整: こどもにわかりやすく伝える 3, 一緒にこだわる: 大人が児を理解しペースを合わせる。が重要であるとまとめていただきました。

限られた時間に密度の濃い解説で 頭がオーバーフローしそうでしたが全体の概念が把握でき次につながるレクチャーでした。

分科会報告

分科会 I 「保育環境」

座長：練馬区医師会病後児保育センター ばるむ

長谷川 ヒサイ

1) 短日利用の病児保育室で、障害児3名を受け入れて保育し、問題点を投げかけてくださった報告でした。事前の情報源が乏しい中で、個々に大きく異なる(かみつき、とび出し、たたく、かんしゃく、パニック)などの行動が見られ、保育の難しさを実感されました。スタッフの方々の熱意を感じます。

病児保育であっても、健常児と障害児の統合保育には変わりありません。子ども達が、共に過ごし、共に学び合える場の環境づくりに、保育に関わるすべての大人が認識して取り組む必要があります。そのことを示唆してくださいました。

2) スタッフ全員で取り組んだ自己評価には、意義深いものがあります。保育看護全般では、よい結果がえられたようです。低かった評価対象については、問題点を明確にして自らの課題に気づき、皆んなで改善していきたいと報告されています。病児にとって、すばらしい環境が用意されるように大切な方向性を示してくださいました。

3) お迎えサービス付き保育は、医師会病院併設ならでの発想と実行力が実を結んだすばらしい報告でした。お迎えサービスを通して見えてきたことでは、大きな親支援になっていることと、子どもをより早く安全な環境におく

ことが最も重要であると報告されていることから、現代の厳しい社会環境の中で、大きな大きな「こども・親支援」につながっていると思います。ここに重要な意味があります。

3例のセッションでは、いろいろな視点から保育の環境がテーマでした。大切な人的環境である保育者の真摯な心意気が感じられる、有意義な発表でした。



■ 分科会II「感染症」 ■

座長：まなこどもクリニック 病児保育室 ポピンズルーム

原木 真名

分科会2は感染症の研究発表でした。

福富医院 すずらん病児保育園の福富万季先生は、新型インフルエンザ対応について、利用者と地域の病児保育施設にアンケートを行なった結果についての御発表でした。情報の混乱の中で、対応策を模索している施設の苦勞が伝わってきました。

OCFC 病児保育室 うさぎのママ 金子織江先生は、病児保育室で新型インフルエンザを保育した際のご経験を御発表下さいました。インフルエンザ流行期に、一

般保育室への紛れ込みをいかに少なくするかの工夫、地域の感染症情報を的確に把握する必要性などが議論されました。

浜本小児科病児保育室 浜本芳彦先生は、病児保育における新型インフルエンザ対策と課題について、感染防止対策や診断、情報処理などについて、大きな視点からの御発表でした。

病後児保育センター ばるむ内田寛先生は、施設における感染性疾患の特徴と展望についての御発表でした。季節により感染症の流行状況がちがい、隔離室の利

用率もかなり変わってくる状況があり、地域の感染症情報の把握が必要であるとの結論でした。それをうけて、フロアより、保育所における流行状況のデータベースの運用についての御発言がありました。

病児保育室における感染対策は、診断と、情報共有、そして、隔離の判断が重要です。

新型インフルエンザ流行により、感染対策の重要性を保育現場でも実感した一年だったと思います。感染対策に熱心に取り組んでいらっしゃる現場の声は、午後からのシンポジウムにもつながる大変興味深いもので、熱心な討論がなされました。

■ 分科会III「大学における病児保育施設」 ■

座長：さとう小児科医院 病児保育室バンビーノ

佐藤 里美

分科会3では、「大学における病児保育施設」として、2つの演題が発表されました。まず岡山大学病院ますかつ病児保育ルームの川畑先生からは、平成18年に学内で行われたアンケート結果をきっかけに、病児保育室開設までの約2年間にわたる活動内容について報告がありました。ハード面、ソフト面ともに、大学病院の特徴を有効活用し取り組まれた経過報

告でした。そして東邦大学医療センター大森病院小児科の渡邊先生からは、病児保育室ひまわりの現状についての報告でした。こちらは女性研究者の育児との両立を目的とした、文科省の「女性研究者支援モデル育成」助成事業ということで利用対象者に制限があるようですが、開設以来順調な滑り出しのようでした。どちらの場合もその運営形態から、利用対象者が

大学職員または関係者に限られています。今後は大学から社会への開放サービスのひとつとして、情報の発信と将来的には学外希望者も利用可能となるよう、地域に開かれた病児保育室になられることを期待したいと思います。



■ 分科会IV「連携」 ■

座長：ぼけっと病児保育室

島村 恵美子

1 題目は「病児保育室における市外利用者の扱いについての一考」だった。平成21年度からは補助金は定額+実績払いとなり補助金も事業実績に即した配分となったが、他市町村からの利用者が多い施設にとっては、かえって補助金の減額となる可能性も考えられるという問題提起だった。

この発題をされた千葉市は定員4名の枠内は千葉市内の利用者を優先することになっており、結果的には市外の利用者を受け入れることは経営的には持ち出しになる。しかし、医療機関併設型の施

設のため、市外のかかりつけ患者が利用希望する場合があります。受け入れざるを得ないことも事実である。行政の枠組みを超えた相互乗り入れなどの仕組みも考慮する制度を要望する必要性を強く感じたと共に、協議会と連携を図ることで、協議会からも国に訴えてほしいと感じた。

2 題目は「保育士のBLSに対する意識調査～BLS講習会を通じて地域連携をはかる～」だった。近隣の保育園に呼びかけ、保育士を対象にBLS講習会を行い、その前後にアンケートを実施し、救

命処置について保育士の認識を調査するものだった。

講習会後のアンケートで、今後参加したいかの問いに96人中95人が参加したいという回答だった。が、実践する自信がないと答えた人が36%もいて、定期的に講習会を行う必要があることがわかった。多くの保育士が必要を感じ参加したいと思う講習会を企画することで、今後も地域の保育園と連携を図る必要性を感じた。

3 題目は「病児保育室と関係機関が連携した一事例」だった。スポーツで右下腿を骨折し、主治医より完治2カ月を要するといわれた5歳男児をめぐる、病児保育室が調整役となり、子育て支援室、

通常通っている保育園と連携をとった事例であった。病児保育室が調整役となり、どのタイミングでどこに相談をしていくか保護者

とともに考えたことがうまくいったとのことである。

病児保育室には病気以外にも様々な問題を抱えた子どもたちが

入室してくる。今後ますます関係機関との連携が必要になってくるので、是非参考にしたい事例であった。

ワークショップ報告

ワークショップ1

「日々の感染症対策への工夫」

報告者：東小岩わんぱくクリニック病児保育室わんぱく

小島 博之

ワークショップ形式ということで、参加施設にあらかじめアンケートに答えていただき、その結果を踏まえ、いくつかの施設にそれぞれの取り組みを発表していただく形で進行了しました。

アンケートで再認識したのは、各施設かなり感染症対策は進んでおり、トラブルはほとんどないこ

とです。協議会での研修等の成果ではないでしょうか。現在のレベルは保ちつつ、新しい知識や情報は取り入れていき、さらに新規設立する施設にはノウハウを提供するのに、今回のようなワークショップは非常に有効であると感じました。

司会進行は当施設の保育士に

とって初めての経験でしたが、大変勉強になりました。今後貴重な財産となると思います。皆様のご協力のおかげです。あらためて、ご参加いただいた方々にお礼申し上げます。



ワークショップ2

「声にならない声に気づこう」

報告者：練馬区医師会病後児保育センターばるむ

長谷川 ヒサイ

猛暑のなか、全国から事前登録者42名、当日参加者13名の55名で集いました。

最初に、ソーシャルワーカーとして、児童虐待問題も20年関わっていらした辻野恵子講師より、～児童虐待と現代の親の姿、親支援と子ども支援、大人から子どもへの不適切な関わりは親子に止まらず、すべての大人が対象であることから、病児保育室におい

ても例外でないこと、そこで、保育する私たち自身が「アレっ？」と感じ、親子やスタッフの普段と違う姿に気づくには、自身のセルフケアが大切である～とのプレゼンテーションがありました。保育者の心身の健康アップが大切なんですね。

真剣に聞き入っていた参加者は、小グループに分かれ個々の思いや職場の現状、心がけている具

体例、辛い気持ちなどの意見交換をおこないました。職場内での自分の考えを言えるような環境づくりや、ときには自分の気持ちをリラックスさせ、セルフケアに心がけながら、親子に寄り添い、気持ちを傾け、前向きに保育していきましょうというまとめになりました。

最後にコミュニケーションゲームでは、大いに盛り上がり、保育者の笑顔と元気いっぱいふれあいを実感して終了しました。参加者の皆様ありがとうございました。

ワークショップ3

「インシデント管理システム研修会」

報告者：調査研究委員会

羽根 靖之

このセッションは、総論と実技指導の二本立てで行い、深谷委員が進行係を勤めました。総論は、春から劇団に依頼して事前準備した短いドラマ仕立てのDVDを使っでの説明。実技指導は、会場を8テーブル各5人程度で、各テーブルにPCをセットアップして、実際のソフトを入力しながらの体験。そして、会場でのプレゼンはスクリーンを二面用意して、

実際の画面上での指導内容で、わかりやすく充実した内容であったと思います。

しかし、このセッションは、事前申し込みでは参加希望者が一杯で、うちの保育士などは参加不可能となったため、アシスタントという名目で会場入りして、手伝いながらの聴講予定でした。ところが、ふたを開けると、開始時間になっても参加者は数人しか来ず、



開始を遅らせましたが、それでも予定の参加者の約1/3程度しか集まらず、今後、研修希望者には事前登録の意味を理解し、厳守して頂きたいと思われました。

ワークショップ4

「新規開設施設の悩みと不安」

報告者：板橋区医師会病院病児病後児保育室

平澤 恵美子

今回、我々は新規開設の際の悩みや不安などについて討議した。参加施設は、開設後3年以内の施設が大多数を占め、約半数が昨年開設した施設であった。参加者は33名であり、看護師が最も多く、保育士、医師の参加も多くみられ

た。まず、実際にどのような問題があるかを抽出し、引き続き、解決のためにはどうすれば良いのか討議した。

討議されたのは、保育士・看護師の役割、利用者がいないときの勤務、予約方法、キャンセルの扱い、

食事、認知度の向上、医師や医師会との関係、感染症対策など多くの分野にわたったが、ほぼ共通の問題であった。これらは、新規開設に限られない問題ではないかと思われた。

これが正解という解決法が示された訳ではないが、共通する悩みがあり、これらの解決法を討議できたことは有意義であった。

ワークショップ5

「すべての子どもに子どもの時間を」

報告者：特定非営利活動法人 日本クリニックラウン協会

事務局長 塚原 成幸

20年目の節目となる記念大会に参加し、ワークショップを担当するという機会に恵まれたことにまず感謝したいと思います。今回の大会に出席して強く実感したことは、当事者にとって、真に必要なニーズを掘り起こし、従事する人材を育て、制度化させていくためには、それ相応の時間が必要であるということです。

病児保育は、現代社会において必要不可欠な児童・家庭支援の社会的なサービスであるにもかかわらず、近年までは医療行為の補完的な役割と誤解を受けてきた印象がありますが、今日では子どもの成長そのものを支える中心的な役

割を持った発達援助の核と言っても過言ではありません。医療と保育の一体化は正に、子どもに優しい医療サービスの実現を表していると私は考えています。

今回、ワークショップ5を担当させてもらい実感したことは、研究大会参加者のコミュニケーションに対する関心の高さです。会場には開始前からたくさんの参加者が集り、各地の医療施設で行われているクリニックラウン(臨床道化師)の実践報告や、ユーモア・コミュニケーションを熱心に聴講、体験してくれました。

前半のレクチャーでは真剣な面持ちで耳を傾ける姿が見受けられ、後半は大きな声を上げながら笑顔の交流をしている参加者がたくさんいました。中でも、ノンバーバル(非言語)のかかわりから相手のサインを読み取るためのゲームや、即興で組んだパートナーとパートナーシップを築くための演習は、会場全体が歓声に包まれる



ほどの盛り上がりでした。

私は臨床道化師として日頃から「よく楽しむことができる人が、よく楽しませることができる」と思っています。往々にして援助者は自らの充足感を後回しにして、自らを疲弊させてしまう傾向があります。それを未然に防ぐためにしなやかな発想を手に入れようと思ったのが、ユーモア・コミュニケーションワークショップです。このワークショップを通じ、病児とのコミュニケーションが円滑になり、子どもとかかわる援助者が前向きな姿勢で仕事を続けていただけたらと感じています。

ユーモアは人と人の障壁を無くし、信頼感を高める効果があります。是非、多くの方が身近に携えて、それぞれの現場で役立っていただけたら心より幸いです。ありがとうございました。



ワークショップ6

「保育室のヒヤリハット」

報告者：病児保育室「たぬき先生」

後藤 素子

ワークショップはまず4つのグループに分かれ、自己紹介からスタート。各自の施設において事故を無くすために工夫しているところを1つ写真に撮ってきてもらい、それを含めての自己紹介です。

利用者たちの持ち物を色分けして管理するなどの工夫が多く見られました。

次に保育室での場面の絵を見てどこが危険か、どう対策をとるか考える「リスクセンスをみがこう」

で肩慣らし。事故を無くしていくために基礎となる考え方のレクチャーの後、事故例を使って対策を話し合うということを試みました。登場する人物ごとに行動を整理するというMedical SAFERという方法を紹介するとともに、その「時系列事象関連図」から各グループでの対策を出し合います。参加者にとっては初体験のものでとまどいもあったかもしれません

が、それぞれ良い対策案がだされました。

時間の関係で対策案の検証まではいかず、不消化な部分が残った

のは否めません。参加した約半数の施設ではヒヤリハット報告書を取り組んでいないという実態もあり、病児保育の質の向上を目指す

上でこのテーマは欠かせないものであることを改めて実感した次第です。

■ ワークショップ7 ■

「地域との連携をどう展開するか」

報告者：あおば医院病児保育室

当日は参加者以外にも興味をお持ちの方々が加わり、事前に行ったアンケートに基づいて話を進めていきました。

保育所との連携では、流行している病気や利用児についての情報交換を行いたいのが個人情報のため難しい、病児病後児保育に否定的な考えの保育所もあり連携が進まない等の意見がでました。その一方、根気強く働きかけることで理解が得られるようになったという施設

山崎 恵里子 渡辺 ひとみ

もありました。

医療機関との連携では、利用者のかかりつけ医に郵送等で利用報告を行っている施設があり、実際にあった例や反応等、お話しいただきました。他にもお聞きしたい事はたくさんありましたが終了時間になってしまったので、積極的に活動して連携をつなげていきましょうと締めくくりました。

初めてワークショップを担当させていただき、参加者の意見を上

手に引き出し、まとめることの難しさを感じましたが、他施設の取り組みや意見を聞くことができ、貴重な時間となりました。



■ ワークショップ8 ■

「病児保育室の現状と課題」

報告者：ナオミ保育園病後児保育室バンビ

施設長 早川 みどり

誰もが日々ぶつかる悩みを抱えて、たくさんの情報や解決策を得たいと願ってのさ参加であった。(大多数は医療機関併設型の看護師職)、実際は各施設の状況を共有するにとどまり、課題を深めるには至らなかったもので、物足りなく思われた方もいたかと思うが、内容を整理しておきたい。

どの施設も、受入れ時、医師連絡票をもとに病状や生活の背景を丁寧に聞き取り、保育や看護の計画づくりに生かしており、午前午後交代するスタッフ同士の引き継ぎも詳細を伝える努力をしてい

る。また利用者の大半が継続的利用ではないという点で、保護者や子どもとの信頼関係づくりを心砕いている。

隔離室については、多い所で7室設置という施設もあったが、完全隔離から、ゆるやかに行き来できるものまで構造も様々で、スタッフ数と子どもの対数に関しては、病院や保育園からの応援体制があるところもあるが、複数の病種を受け入れて、やりくりし苦勞しているところもある。多くは年齢や病状により安全を考えながら対数は幅をもたせて対応してい

る。

病後児か病児かの判断は医師により異なったり、検査結果はマイナスであっても、子どもの症状から感染症をめぐいきれないなどの現場の悩みがある。

保育所併設型や単独型の場合、医師との連絡体制が未確立のところがある。やはり保育所嘱託医や地域の医療機関との連携体制をつくる必要がある。

今回、話題は出なかったが、保育内容については悩みが多いと思う。今後はいろいろな実践が出されるとよいと思う。(異年齢・少数・隔離室での保育)

病児保育での出発点である保護者の就労支援という観点から、受入れ幅をとっていき温かさも忘れてはならない。

▶▶▶▶▶ **ポスター発表報告** ◀◀◀◀◀

■ ポスター発表1「連携」 ■

座長：病後児保育室ライオンのこどもべや

芳賀 幸子

ポスター①の連携では、病児・病後児保育と地域との連携に関する発表が3組ありました。

一つ目は『明日への病児・病後児保育を切り開く』です。同じ区

の施設が集まり、事例を通して話し合い、交流を深め、知識を共有する事で、自信へと繋がるという発表でした。

二つ目は『東京都病児・病後児

ケア相談支援事業』です。区と連携し、公立の保育園の看護師や保育士を対象とした、病気についての講演等、地域の子供達にとって、よりよい環境を提供する事業として運営されていました。しかし今後続けていくのが難しい状況との事でした。

三つ目は『病児保育室と緊急サ

ポート事業の連携について』です。厚生労働省の委託事業として運営し、緊急サポート事業が地域の中でスムーズに行われるようア

ンケートを実施し、その結果を分かりやすくデータを用いて、熱い発表をされました。

初日で程よい緊張感もありまし

たが、手遊びや積極的な質疑応答が多くあり、活気溢れる連携の発表となりました。

■ ポスター発表2「感染症」 ■

座長：病児保育室 シェ・モア

山口 まみ子

ポスター発表2「感染症」の感想として、P-2-3と2-4では施設の母体の大きさが経済力に大きな差があり感染予防対策にも差が有るものの、それぞれの置かれた状況の中で最善の努力をされている姿勢がわかる発表でした。また、2-2では単独の施設内にとどまらず地域の施設が集まり勉強会をし、更に近隣施設の協力を促

し、広く多くの実態調査をしている姿勢に感心しました。そして、2-1では新型インフルエンザの児を預かるという大変な挑戦をした事実と結果を報告され、ひとつの例として参考になりました。しかし、この大会では医師の参加も多く、演者に対し施設長の判断である感染対策に質問があり、答える事が出来ない演者に対し更に質

問を重ねるといった場面がありました。この事から、質問者と演者が対等に討論できない場合の難しさを考えさせられました。

最後に、演者側には多様な質問に答えられる責任者が必要である事。また質問者側には批判と思われる言葉の強さや表現は控え、共に向上していこうという慈愛と導きの心で質問をする事が、病児保育を続けていこうとする保育士・看護師の質の向上に繋がるのではないかと感じました。

■ ポスター発表3「保護者の意識調査」 ■

座長：いなみ小児科附属病児保育室ハグルーム

蔵本 由起子

四つの課題が発表され、その内三つの発表がアンケートを利用し、それぞれの研究目的に合わせて保護者の意識調査を分析した事を発表していました。

他の一つは、現場で働く者にとって考えなくてはならない課題の一つで、帰宅時の保護者への

説明をわかりやすくする工夫についてという内容での発表でした。

保護者の方へ利用した子どもの様子を的確に伝える、質問に丁寧に答え助言する事をより効果的にする為にはどのようにするかを職員で検討し、看護保育日誌を手渡すのと一緒に小児科で作成した

「看護ポイントシリーズ」と言う、病気の内容や症状、食事、病気の対応が記載された物を渡すようにした結果、保護者に丁寧に病気や症状を伝える事が出来るようになった。

職員にとっても勉強になったと発表があり、ちょっとした工夫が保護者への説明をよりわかりやすくする事と職員の意識向上へつながる事がわかる発表でした。

■ ポスター発表4「新しい試み」 ■

座長：おおた小児科・循環器科 病児保育室ミルキー

太田 まり子

「病児保育室とクリニック間の構内ネットワークによる相互通信システムの利用」病児保育室「きりん」福田 瑞穂氏

別棟で運営している、小児科と病児保育室をカメラと地下ケーブルでネットワークを構築し、双方をリアルタイムで接続する試みの発表でした。常に見られている事と、見守られている事、の相反する面があり、評価も職種によりばらつきがあるようでした。構内での活用に加え、外部との双方向通信など、今後の取り組みに期待できる試みであると感じました。

「病児保育協議会推奨のインシデント管理システムを導入して」エンゼルさわら 光永 麻里氏

本システムは、事故を最小限に抑える有効なものになり得るという評価でした。さらなる発展のためには、より多くの施設で導入し情報を共有する事が重要で、そのためには、パソコン操作に不慣れな人や、多忙な業務の中でも簡単に入力できるよう、今よりもさらに使いやすいシステムが必要と考えられるという事でした。また、フロアからシステムの利用料金の質問等も出て、多くの皆さんも関心をもたれているようでした。

保育室通信「星の子だより」の発行とその結果 東北大学病院病後児保育室「星の子ルーム」 渡邊 晶子氏

大学病院の病後児保育での広報



に、お便りを発行しているという発表でした。年3回保育士が作成発行し、発行後は利用者や問い合わせが増えるなど確かな手応えが感じられ、今後も継続発行していきたいという事でした。作品の出来も素晴らしく、いつどのようになっているか等の質問が出されていました。利用対象者が学内に限られる為、印刷物の広報も効率的に利用できるようです。この発表で刺激を受け、お便り発行に踏み切る施設も出そうです。

■ ポスター発表5「保育の工夫」 ■

座長：ほあし子どものこころクリニック

帆足 暁子

ポスター発表5は「保育の工夫」として5題が発表されました。

いずれも病児保育における保育看護の質を高めようとし、子どもの最善の利益を保障する為の日々の工夫の発表でした。保育における基本となる「保育所保育指針」を学習されながら保育目標やテ-

マを作成する経緯、個別予定表の提示の実践、保育看護計画に取り組みの課題や、遊びの整理、保育所保育指針と病児保育マニュアルの実践に関する調査等、いずれの施設においても大切な内容であり、熱心な意見交換がみられました。

また、「北東北病児保育室交流会分科会」の発表が2題あり、各施設の発表と共に、地域における学習会の発表は地域連携にも繋がると期待されます。

座長として今後の発表に向けて留意して頂きたいことは、発表は抄録集に掲載された内容の発表であり、かつ、抄録に掲載された時点で発表内容は結果がでていることが条件であることです。質の高い発表を目指したいと思います。

協議会創立20周年にあたり表彰状と感謝状の授与

全国病児保育協議会創立20周年にあたる今大会の総会で、協議会創立以来、当協議会発展のため御奮闘されてこられました保坂智子名誉会長と帆足英一顧問に表彰状が贈られました。また、協議会副会長を務められた故野澤良美先生より寄付をいただき、妹様の小川昭子先生に感謝状が贈られました。



表彰状を受け取る保坂名誉会長



表彰状を受け取る帆足顧問



感謝状を受け取る小川昭子先生

第20回全国病児保育研究大会 in 東京「広報 WORLD」報告

151施設の皆様に、ご協力いただいた「広報WORLD」は、大盛況のうちに終了いたしました。日本地図(近くから見ると???遠くから見ると日本地図)の上に展示した、施設紹介は、圧巻でしたし(広報委員会の自己満足??)ご提出いただいた、施設紹介を冊子にしたものは、初日3時間でなくなるほどでした。

ご協力いただいた施設の皆様、ありがとうございました!

広報委員会 みらく病児保育室 永野



第20回全国病児保育協議会総会議事録

日時：平成22年7月19日(月祝) 11:00～11:50

場所：東京ビッグサイト 国際会議場

一、会長挨拶(木野稔会長より)

一、仮議長および議事録署名人選出

仮議長として帆足英一会頭、および議事録署名人として飯島健志先生と小島博之先生を推薦。

◆拍手で承認された。

一、仮議長による議長選出

会場より立候補者がおらず、佐藤好範先生を推薦。

◆拍手で承認された。

一、木野運営委員長より総会成立の説明

現在の加盟施設は447施設。総会に参加する施設は68施設、委任状を提出した施設は224施設、計292施設になる。これは全施設数の過半数を超えており、総会は成立する。

一、議事

(1) 第1号議案 平成21年度事業報告

運営委員会(木野稔委員長より)

- ・第19回全国病児保育研究大会を開催した(会頭 佐藤 好範)
- ・平成21年7月25日～26日(OVTA海外職業訓練協会 千葉市)
- ・平成21年6月28日(日) 拡大運営委員会(東京TKP丸の内会議室)
- ・平成21年7月24日(金) 常任協議員会(千葉ホテルスプリングス幕張)
- ・平成21年12月23日(水祝) 拡大運営委員会(東京TKP丸の内会議室)
- ・平成22年3月20日(土) 常任協議員会(東京八重洲ダイビル)

研修委員会(南武嗣委員長より)

- ・第1回 研修委員会 平成21年7月25日(千葉市) 研修の対象、位置づけ、ネーミング、テーマの柱立ての再検討

- ・第2回 研修委員会 平成21年9月26日、27日(鹿児島) 病児保育マニュアルと病児保育研修テキストの項目の検討 平成22年度の基礎研修内容の検討 平成22年度のステップアップ研修内容の検討
- ・第3回 研修委員会 平成22年3月20日(東京) 東京大会へ向けて基礎研修、ステップアップ研修の具体的な計画 東京大会へ向けて、基礎研修の冊子の作成を検討

調査研究委員会(池田奈緒子委員長より)

- (1) 委員会開催 第1回調査研究委員会(平成21年7月25日) 議事:① 第19回研究大会におけるデモンストラシヨンの確認 ② インシデントレポートシステムパイロット施設の経過報告 ③ 実態調査の途中経過、結果報告 第2回調査研究委員会(平成22年2月7日) 議事:① 第20回研究大会における分科会の内容、方法他 ② 次期研究委員長について
- (2) 調査 平成19年度実績調査 181施設から回答を得た。 平成20年度実績調査 195施設から回答を得た。 平成19年度実態調査 197施設から回答を得た。 それぞれ集計し、資料とした。それぞれの回答を得た施設に集計結果を発送した。
- (3) 研究 インシデント管理システムの標準化、運用 標準化に向けてコンピュータソフトウェア利用の是非を検討、パイロット施設での仮運用を行う。無料配布した常任協議員からの回答が殆ど得られなかった。 インシデントシステムの発売に向けて管理工学研究所と打ち合わせをした。スケジュールならびにパッケージ化について、マニュアルについて、データの収集配信について等。

広報委員会(神原雪子委員長より)

- ① 病児保育ニュース発行:各施設紹介、支部研修会紹介など
- ② ホームページ関連リニューアルをおこなった月1回をめどに更新 病児保育ニュース(バックナンバー)、厚生労働省の通達などの情報を掲載
- ③ 研究大会での広報の部屋を開設:病児保育についてマスコミでの紹介記事(テレビ・新聞・雑誌な

ど)を展示、各施設のパンフレットなどの紹介

④下記学会にて広報活動を行った

日本医療保育学会
日本小児科学会
日本小児看護学会

④委員会の開催

平成21年7月25日 千葉
平成22年1月30日～31日 大阪

⑤機関誌発行にむけての編集委員会準備委員会として活動

平成21年度年会費納入状況・マニュアル販売状況
(木野稔委員長より)

入会金428,000円(入会施設42施設・準会員4名)、事業年会費9,725,840円(396施設・準会員23名)、賛助会費480,000円の納入があった。年会費は平成20年度が12施設、平成21年度が18施設未納となっている。必携・新病児保育マニュアルの売上冊数は373冊、10年のあゆみの売上冊数は34冊であった。

(2)第2号議案 平成21年度決算報告(木野稔運営委員長より)

平成21年度決算について 予算対比増減に対する説明

収入の部については、マニュアルの販売が、改訂版を加盟各施設へ無償配布したことで当初予算を下回ったが、千葉より研究大会補助金が100万円返金され、収入合計は当初予算を約190万円上回る25,858,436円となった。支出の部の合計は、支部合同研修会補助費が45万円、印刷費が約72万円、予備費が90万円、それぞれ予算を下回り、また、機関誌編集委員会費30万円、機関誌発行準備費150万円、インシデント管理ソフト購入費200万円の出費が今期に繰り越しになったため、当初予算を約670万円下回る11,043,633円となった。したがって繰越金は当初予算を約860万円上回る14,814,803円となった。

平成21年度決算報告

15ページに掲載の決算報告を参照

監査報告(二宮剛美監事より)

会計帳簿および関係書類を監査した結果、正確であることを認め、収入・支出および決算処理、平成21年度事業は適正に行われていることを証明いたします。

◆第1号議案の平成21年度事業報告ならびに第2号議案の平成21年度決算報告が、拍手で承認された。

(3)第3号議案 平成22年度事業計画案

運営委員会(木野運営委員長より)

第20回全国病児保育研究大会を開催する
(会頭 帆足英一)
平成22年7月18日～19日
(東京ビッグサイト)

<運営委員会>

- 1、20周年記念事業プロジェクト(法人化、永年勤続表彰制度、記念誌・機関誌の発行、病児保育施設認証制度等)を継続して行う
 - 2、厚労省他行政機関への要望等、病児保育事業の向上に資する活動を行う
 - 3、支部会組織の充実と支部活動の活性化を行う
- 平成22年7月17日(土) 常任協議員会
(東京グランパシフィック LE DAIBA)
平成22年9月20日(月祝)
常任協議員会(大阪)
平成22年11月または12月(予定)
運営委員会
平成23年2月または3月(予定)
常任協議員会

研修委員会(南 武嗣委員長より)

- 第1回 研修委員会 平成22年7月17日(東京)
東京大会の基礎、ステップアップ研修の検討など
会議予定
平成22年9月ごろ 第2回 研修委員会
東京大会の反省、研修プログラム・テキスト、記録集の検討
次期大会へ向けての計画
基礎研修の今後のあり方など

調査研究委員会(池田奈緒子委員長より)

(1)委員会開催

- 第1回調査研究委員会(平成22年7月の予定)
議事:①第20回研究大会分科会におけるデモンストラーションの確認
②平成21年度実績調査の途中経過、結果報告
第2回調査研究委員会(未定)
(2)調査 平成21年度実績調査
(3)研究 インシデント管理システムの標準化、普及、運用、集積、分析

広報委員会(神原雪子委員長より)

- ①病児保育ニュースの発行(内1回は総会・研修会特集号)
8月(総会特集号)を含む年5回予定

<16ページに続く>

全国病児保育協議会 平成21年度決算報告

《収入の部》

	21年度予算案	21年度決算額	予算対比増減
前年度繰越金	12,675,676	12,675,676	
事業年会費	8,500,000	9,725,840	1,225,840
賛助会費	500,000	480,000	-20,000
入会金	300,000	428,000	128,000
マニュアル・テキスト等販売代金	2,000,000	1,548,725	-451,275
雑収入	1,000	1,000,195	999,195
合 計	23,976,676	25,858,436	1,881,760

《支出の部》

	21年度予算案	21年度決算額	予算対比増減	
事業費関係	研究大会補助金	2,000,000	2,000,000	0
	記念大会補助金	1,000,000	1,000,000	0
	調査研究委員会費	700,000	678,827	-21,173
	広報委員会費	500,000	470,530	-29,470
	研修委員会費	500,000	233,041	-266,959
	運営委員会費	350,000	476,518	126,518
	常任協議員会等会議費	1,500,000	1,177,108	-322,892
	機関紙編集委員会費	300,000	0	-300,000
	機関紙発行準備費	1,500,000	0	-1,500,000
	インシデント管理ソフト購入費	2,000,000	0	-2,000,000
事務費関係	人件費	500,000	435,400	-64,600
	旅費	300,000	160,400	-139,600
	消耗品費	80,000	9,949	-70,051
	印刷費	4,000,000	3,277,035	-722,965
	通信費	200,000	171,710	-28,290
	ホームページ維持管理費	300,000	300,000	0
	雑費	30,000	3,115	-26,885
支部合同研修会補助費	1,000,000	550,000	-450,000	
予備費	1,000,000	100,000	-900,000	
合 計	17,760,000	11,043,633	-6,716,367	
繰 越	6,216,676	14,814,803		

全国病児保育協議会 平成22年度予算案

《収入の部》

	21年度決算額	22年度予算案
前年度繰越金	12,675,676	14,814,803
事業年会費	9,725,840	9,000,000
賛助会費	480,000	500,000
入会金	428,000	300,000
マニュアル・テキスト等販売代金	1,548,725	1,500,000
雑収入	1,000,195	1,000
合 計	25,858,436	26,115,803

《支出の部》

	21年度決算額	22年度予算案	
事業費関係	研究大会補助金	2,000,000	2,000,000
	記念大会準備金	1,000,000	0
	調査研究委員会費	678,827	700,000
	広報委員会費	470,530	700,000
	研修委員会費	233,041	300,000
	運営委員会費	476,518	500,000
	常任協議員会等会議費	1,177,108	1,500,000
	機関紙編集委員会費	0	300,000
	機関紙発行準備費	0	1,500,000
	インシデント管理ソフト購入費	0	3,000,000
事務費関係	人件費	435,400	1,200,000
	旅費	160,400	300,000
	消耗品費	9,949	80,000
	印刷費	3,277,035	2,600,000
	通信費	171,710	200,000
	ホームページ維持管理費	300,000	300,000
	雑費	3,115	30,000
支部合同研修補助費	550,000	1,000,000	
20周年記念プロジェクト関連費	0	1,500,000	
予備費	100,000	1,000,000	
合 計	11,043,633	18,710,000	
繰 越	14,814,803	7,405,803	

<14ページより>

② HPの拡充

関連の学会の情報・各ブロックや都道府県段階での取組の紹介

③ メルマガ配信

④ 広報関連資料の整備

⑤ 広報委員会開催

平成22年7月17日 東京

平成23年1月 予定

⑥ 各学会での発表(渉外的広報)

日本小児科学会、日本医療保育学会などで発表

⑦ 研究大会の広報を保育看護の学会誌雑誌へ掲載

⑧ 企業など関連ある事業への広報を考慮中

(4) 第4号議案 平成22年度予算案(木野 稔 運営委員長より)

平成22年度予算案について

収入の部は事業年会費9,000,000円、賛助会費500,000円、入会金300,000円、マニュアル・テキスト等販売代金1,500,000円、雑収入1000円(これは主に銀行利息です)、合計26,115,803円という予算にしております。支出の部は、研究大会補助金は例年通り200万円です。広報委員会費は広報活動強化のため20万円増額して70万円、機関紙編集委員会費と機関誌発行準備費は前期から繰り越しとなっている30万円と150万円を、またインシデント管理ソフト関連費は、前期からの繰り越し分の200万円(開発費)と今期分100万円(維持管理費)の併せて300万円をそれぞれ計上しております。その他支部合同研修会補助金を100万円、20周年記念プロジェクト関係費用として150万円、予備費を100万円とし支出合計は18,710,000円となり、繰越は7,405,803円です。

平成22年度予算案

15ページに掲載の予算案を参照

なお、インシデント管理ソフトについては、どうすれば加盟各施設に使っていただけるか、価格も含め早急に検討していきたい

質 疑

① 保育所保育指針の改定に伴い、病児保育協議会として具体的な施策を考えているのか。

現在具体的なものはないが、今後病児保育施設の認証制度に向けて自己評価基準の策定に取り組む際には、保育指針を参考にすることになる。

② インシデント管理ソフト関連費について、また普及の見込みについて説明を。

インシデントソフトについては、開発は個人レベルのものであり費用には入っていない、このソフトを利用するためのサーバー立ち上げ、保守管理に要する費用としている。本大会においてもソフトのデモを行っているのを見ていただければ全会員施設が利用できる可能性があるものと考えます。

③ 本協議会は医療機関併設型が主流であるが、保育所型について議論の場が必要であり、部会等を設置してはいかかがか。

保育所型については、体調不良児型を含め今後役割は一層重要になるので、その方向で検討したい。

◆第3号議案の平成22年度事業計画案および第4号議案の平成22年度予算案について、拍手で承認された。

(5) 第5号議案 平成22年度役員改選案(木野 稔 運営委員長より)

今回の総会をもって役員の任期が満了となり、役員改選となる。先に行われた常任協議員会において次期役員候補が選出されたので提案をします。常任協議員18名、委嘱常任協議員5名、監事2名。

◆第5号議案の平成22年度役員改選案が、拍手で承認された。

一、協議会創立20周年にあたり保坂名誉会長と帆足英一顧問に表彰状、小川昭子先生に感謝状が授与された。

一、第21回全国病児保育研究大会(大分)について、藤本 保次期会頭から挨拶があった。

一、閉会挨拶(木野会長)

以上

今回より協議会ニュース編集事務局が
変わりました。

〒577-0802

大阪府東大阪市小阪本町 1-11-3

病児保育室こひつじ 岸本 範子 宛

TEL.06-6730-5828 FAX.06-6730-5828

E-mail kohitujji@fujimoto-clinic.org

全国病児保育協議会事務局

〒535-0022 住所：大阪市旭区新森 4-13-17 社会医療法人真美会中野こども病院気付

担当：藪田・堀込 電話：06-6952-4778 FAX：06-6954-8621